

4・空を見れば春、地を見れば冬だ



山賊がいた昔の道

今思うと何年か前のことのように。何年か前ということは既に50年も前と言う話になる。私は「モッコル」という所に住んでいたが、その時娘2人を初等学校へやっていた。

畦道から通じている村道は遥かに遠い道で、雨が降るときは家内が傘をさして子供を連れて帰ることもあった。私は官舎だったため朝早くスリークォーターで出発し夜遅く退勤したので、家の中のことは家内に任せ、詳しいことは知らなくて、留守中の話は後で色々聞いて知っていた。寒い日、暑い日、約2年を過ごしトングアン洞へ出掛けたが、特に「モッコル」は今のテヨン洞で大都市になり、畦道は何処に行ったのか形跡さえなくなった。畦道からつながる道は、今の市内で、ヘウンデ道を行くと右側にある大都市全部に当たる。

私はこの道を通るときは昔のことを思い出す。ムンヒョン洞から今のシンチョン道の峠までは、昔は車道しかなくて両側は林で覆われた山だった。私はスリークォーターに幌を掛けて中に官舎の職員や学生を乗せて出退勤をした。だから時間をみんなが守らなければ、待っている人達に支障を与えることになる。車道だと言うがアスファルトではなく砂利が敷かれただけの道だった。

ある日、クアンボク洞から車が出発するのに、一人が来なかった。12人乗りの車に乗って待っている人達は夜9時になったので腹が減ってたまらなかった。男達は酒を一杯やってこようと言いながら一人二人と降りて、そのうちその不明の人が何処にいるのか分かってきた。だが10時になってどうしようもない。学生達は腹が減ってもう駄目で、もう行こう！と車が動き出す。遅く官舎に帰り疲労困憊正体なく眠りこけて……翌日起きて噂を聞くと、昨夜車に乗ってこなかった同僚の課長が、ムンヒョン洞で一人真っ暗がりの山の峠を越えとぼとぼ歩いてくると山賊に会い、鞆や時計など全部盗まれ、その上殴られて滅茶苦茶になって帰ってきたと言う。その前からこの峠には山賊がいると聞いていながら遅くまで車を待たせたのだが、どんな客と会い酒をどれだけ飲んだのかね……？遅くなるほど人を待ち伏せる山賊に出会ったのか？と思いが塞ぐのを禁ずることが出来なかった。

空を見れば春、地を見れば冬だ

陽炎が立つような空は今年の春に見たような気がする。ほのかな日光が私の心をときめかす。だが土地を見ると凍りついた冬だ。

山も野原も褐色にやつれ、わびしい気持ちを禁じえないが、裸木が遠くの町内を隠しきれないで露出させている……これが偽りのない風景だ。率直な裸木は暫くするとまた気が変わってすべてを覆ってしまうのだ。空は嘘をつかない。雲がひっきりなしに空を覆ってしまう。考えずに生きる……ぼやっとして生きる……と言ってみても役に立たない。老いるに従い、考えずぼやっとするという残り少ない人生……これは帝命に従うものではない。

だからはっきりと気を引き締めなくてはならない。山も役に立たず海も役に立たない……天だけ信じて生きて行こう……私をどうするのか……！死ぬことしか残っていない。しかし死ぬことを安らかにさせ給え……楽しい夢を永遠に望みつつ、その永遠の最後を華やかにさせ給え……これが願いだから天が願いを叶えてくれるだろう！という気持ちを固く抱きながら休み休み歩いて行く。

三遷の教え

子供の教育に環境の影響が大きい理由として孟子の母が息子のため三度も家移した例が挙げられ、この例は子女教育を大事にする父母の執念と言う意味で使われる。

孟子は幼くして父がなくなり母の手で育った。初め墓地の近くに住んだが、幼い孟子は墓堀人夫の真似ばかりして遊んだ。孟子の母はこれではいけないと思家移したが、そこは市場の近くだった。

それで今度は商人の真似ばかりして駄目だ……孟子の母はよくよく考えた末、寺子屋の横に移住した。果たして寺子屋で祖先に仕える真似をして遊ぶ息子を見て、孟子の母は初めて安心した。そのせいで孟子は後年孔子に次ぐに値する賢者となった。

この外にも孟母断機(つぎ)の教えと言う話がある。遊学した孟子が久し振りに家に帰ってきたが、その時孟子の母は機糸の枠の前に座り機織をしていた。勉強がまだ終わる前に帰ってきた息子を見るや孟子の母は織っている機糸を長刀で切ってしまった。勉強を途中で放棄すればちょうどこのように機織の機糸を切ってしまうのと同じだと諭した。

本泥棒は泥棒でないそう

泥棒の中でも本を盗むのは泥棒ではないという言葉があった。本といえば、文章を読むのが嫌いな人が多いので、読書を奨励する意味から生じた言葉のようだ。泥棒は泥棒だから言うことはないのだけれど読書を好む泥棒だから崇拝に値する泥棒には違いない。書店で本を盗んだ人が捕まって、私は泥棒ではないよ……と言えば滑稽だ。

地下鉄で、市民の読書を奨励するため本箱を設置し、市民達が進んで本を寄贈したものの、いくら経たないうちに全部なくなった。泥棒でない泥棒が持って行ってしまったからだ。

釜山郵便局には出会い場所があって多くの人達が利用している。静かで清潔なこの出会い場所には本箱があり、若干の本が立てられていて毎日人を待ちながら読んでいる。

しかし、本が多くはないので隙間が多い。少し前に私は1巻でも隙間をもっと塞ごうと「タンポポ」と「元老坊3号」を1巻ずつ持って行って本箱に立てて置いた。友達と会うためにこの出会い場所に出掛けると、まず私が立てた本の有無を確かめることになる。

数ヶ月間、本が無事なのを見れば安堵する。今日も会う人があり、そこに行ったが、「元老坊3号誌」はあるが、「タンポポ」がなくなっていた。瞬間残念な気がしたが、落ち着いて考えてみると、私は張り合いが出て来た。私が書いた「タンポポ」を読んでみて興味があって、時間がなくて全部読めないのだから家に持って帰って読もう考えたのだ、と思うと私の文を好むファンだと張り合いを感じたのだ。とすれば泥棒ではなかった、と考えると、もう1巻持って来て補充しておかなくてはならない!と思った。

バスの中の酔客

南浦洞地下鉄駅を抜け出し影島大橋で青鶴洞に行くバスを待つ。今日に限ってバスがなかなか来ない。バスを待つ人はどんどん増える。ソンドから来る30番バスが長いこと掛かって到着し、乗ることが出来た。超満員で足の踏み場もない。

私は運転台に近いところでやっと取っ手に掴まって立っているが、丁度私が立っている前に座っている人が、しょっちゅう手振りをしながら異常な行動をする。停留所でおばさんが乗ってくると手振りをする。私には知った人かどうか分からなかったが、懐から財布を取り出し名刺を1枚取り出すと、そのおばさんに受け取らせようとする。受け取るまいとすると、手を掴んで無理に名刺を手を取らせる。

すると、おばさんが「酒に酔ったなら静かにしなさい。これは何の真似よ」と腹を立てる。そして後ろの方に人を押し分けてその場所を避けた。すると、その酔客が私に、野郎ども、あれだから……だめなんだ……といいながら、何かを埋めた犬があそこで埋めた犬を咎めている風だったが……。

私は背を向けて、見もしないで前に避難した。少し経って降りる順番が来たので言い返すこともない。酔客は一人で何か独り言を言っていたが天国なのかな……?可哀想な人間だ、と思いながら、私自らを取り締まらなくてはならないと自分を振り返る。私も酒を好むほうだ……私も酒に酔えばあるいは失敗することがないだろうか……?という気持ちですべてを用心深くやろうと誓ってみる。

ちよろちよろ

あれは何の音なのかね……？凍てついた大地に霧雨が降り、ちよろちよろと地面を濡らしているので嬉しいと言っているのです。湿っぽい明け方の道は私の歩みを活発にしてくれ、凍てついた屋上のタンクは果たして……？と謎々になっているので、ミサが終わると帰ってきて第一番目に屋上に登ってタンクを開けてみると、水が一杯になっていて私を更に楽しくさせてくれる。1年に1回くらい水道水が凍って苦労させられたが、今年は2回目だった。

もう大丈夫だろう……！といいつつ、まだ一度は寒い日が来ると言うが、心配することはないだろうと私一人で壮語している。

今朝はフィリピンから神父が来てミサを上げた。見たところ韓国人のようだったが、その話によると司祭叙階を受けてから10年になるが、7年前にフィリピンに行き生活していると言うことだった。話を聞くとフィリピンは法も出鱈目な国で、国民所得も1000ドルしかない後進国だと言う。

あるおばあさんがわが国のお金で1億ウォンに相当する土地を韓国人聖堂に寄付してくれたが、無許可の建物が何棟か建っていて、撤去するのにわが国のお金で3000ドルも掛かるが、まだ撤去をしてくれず、法的には手続きをしても法によると撤去できず、寄付した人に返そうとしてもそれも駄目だと言う。法がないのがフィリピンの実情だと嘆いていた。チョロチョロがチョロリチョロリに変わると直ぐ霧雨が弱くなった。傘を差さなくても構わない程度だ。絹物でも着ている人は雨傘を差すなり走って行くなりしなくてはならない程度だ。

老人は寒いと気付けば風邪に掛かっている

老人は耐久力が弱っていて、少し調子が悪くても病気にかかる。特に老人が風邪に掛かると言うことは、今までの生涯で掛かったことのある病気のすべてが再発するため、風邪だけには掛からないよう努力しなくてはならない。風邪は万病の根源だと言うのはそのためなのだ。だから風邪に掛からないようにしようと思ったら、室内にしろ外出時にしろ暖かく武装しなくてはならない。室内と言っても居間だとか食堂などの温度は内室とは違うので、内室の外では暖かいチョッキのようなものを着て、体の温度にあわせなくてはならない。

25年前に母が1週間風邪を病んで亡くなった時、完治してから20年以上経ち心配のなかった気管支喘息が再発していた。病が既に完治していたと言ってもいつかは風邪を引いたときに再発し、その病が原因で死亡することになる。その再発は風邪が媒体となるので用心しろと言うことだ。

大禧年の意味

農夫達にとっては土地は生命だ。土地が他の部族の手に落ちると、自分もその土地を再び手に入れる希望を持って、土地が氏族と家族に属している限り、

それをいつかは取り戻すため親族の側を離れることはなかった。生計に直接的な影響がない都市の住宅は、1年間だけは復活の権利が認定され、禧年になると取り戻すことが出来た。(レウイ記)

土地と家は間接的に人間の生命と連結されているが、借金によって奴隷に売られて行く状況では直接に人間の生命に抵触する。氏族や家族の構成員の中の誰かが借金のため奴隷に売られることになれば、近い親戚の中で、ヘブライ語で「コエル」と呼ぶ後見人が彼を解放してやらなくてはならない。これが思い通りならなくて、彼が継続して奴隷生活をするようになっても、禧年になると彼を預かる主人は彼の借金を削除してやり、無条件に彼を解放してやり自由人になるようにしなければならない。

禧年と言うのは、6年間種を播き収穫するが、7年目の1年は播種もせず自然に育つ穀物も取り上げず、土地も休ませ、これを7回行った49年になると禧年だという。2000年は大禧年の年だという。絶望の人生にとってエホバの恩恵に希望を掛ける大禧年であるならどんなによいことか。

父母の墓参りを

昨夜は母の祭祀の日だ。私はチョンリョン洞の公園墓地に祭った父母の墓参りをした。3ヶ月前に生け花を整理した墓は、花がそのまま綺麗だ。冬だから芝生も枯れ別に手を入れることもない。丁度真ん前には友人の墓がある。3年前に亡くなったが碑石も新たに建て、夫婦の墓の整理が良くなされていた。生前には親不孝だとひそひそ話をしていたが、父母が亡くなった後は急に孝子になったのだなぁと思った。あるいはそれだからこそ墓を飾るに値すると思った。

その友人が亡くなった日は12月31日だった。それで忘れずに思い出す。それで命日の墓参の時期に墓の手入れもし碑石も新しく作ったのだなぁと思った。その横の別の友人の父母の墓も見回す。下の方にある夫婦の墓は、また別の私の友人の墓だった。ところで、その墓がなくなった。その墓は、夫婦の墓が一つの邑内に2箇所あったのをひとまとめにして、見た目にも良かったが、その場所は別姓の人の碑石に替わっていた。譲渡してしまったようだ。果樹も全部切り取られ、さっぱりと整理されている墓地内の、灰色に整理された墓地の環境は寂しいと言うよりさっぱりとスマートとでも言おうか！

チャガルチの正月・節季の風景

通り道なので、チャガルチで労働服を一つ買うためバスから降りて道端を端から端まで歩いてみた。

この労働服というのは、私の考えでは漁船に乗る漁夫が海で寒さを防ぐために着るパジのようなもので、昔学生服だったクレパ*と同じく生地の内側全部が毛で作られたズボンだ。何年か前に釜山鎮市場で一着買って家でやたらに着て過ごしたが、肌着を着る必要がなかった。風呂屋に行く時や、近所に行くときは、家で着ていたそのまま出歩けばよいという便利な服だ。二着を交代に洗濯して着ているが、その中一着の生地が気に入らず捨てようと思い今日はもう一着買おうとチャガルチ市場を通ることになったわけだ。チャガルチ農協共販場の入口の道端では、正月・節季の風景が極限に達し、人が通り過ぎることが出来ないほど人の波に苦しめられる。女性なら飲食物を買うだろうが、私はそんな物は眼に止まらず、ズボンを買おうと考えてここあそこ探していると、一箇所見つけた。私の気に入ったズボンを選び寸法を見るが、合っているのかわからないのか分からないので、その場で服を脱いで着てみる。一番長いのを持って来てくれといったので私の体にぴったりだ。そのまま着て上衣のTシャツも一つ買って、古いズボンはビニール袋にTシャツと一緒に包んでくれと言って、勘定をして帰る。

バスで影島に差し掛かると、道端に異国人のフィリピン青年なのか、3人の中の1人はスリッパを素足に履いていて、服はどうしようもなくひどいもので寒そうに見える。震えて立っているその人に、私の気持ちでは、古着だけれど今朝風呂屋に行って着替えて捨てる予定のズボンを上げさえしたら内側は毛だからどんなにか暖かいだろうな！と思いながら、バスが走っている最中も後を振り返り、私は後ろ髪を引かれる思いだった。自分の国では生きていけないので、見知らぬ他国の韓国へ来て苦労しているのか？人間の命は同じなのにと、涙が出そうだった。家に帰ると女房から聞きたくないことばかり聞かされた。ズボンの買い方は良かったがTシャツの色は一体どうしたの？と言うかと思うと、いい物を買って着なければならぬでしょ、またこれも捨てることになるんでしょ？という。

今までパークランド**の開襟シャツが暖かいというので56.000ウォンも出して買ったのが、家でやたらに着て膨れ上がっているのは勿体ないと思って、20.000ウォン出して買ったのだ……！と言ったのも間違いだった。労働服と同じくどんな風に着るのだと言っても、それは間違いだなという考えに私も同感だ。私の考えは間違っているのか……。

訳者注：* 生地の種類で学生服によく使用されたという。
：** ブランド名

私は旧正月の茶礼をこのように執り行なった

正月は幼い時は楽しく、年を取ると煩わしくなる。それほど人間と言うものは怠け者なのか……？兄弟間は夫々の子供達が訪ねて来て、することが多いので、遥かに遠い本家に集まることはないが、子供達はソウルから釜山まで大変な苦労だから来られないといった。

*

**

我が家は全員で7人家族だが、孫が金海空軍に勤務中で、ソウルから上の孫娘が来て、6名が元旦を迎えることになったが、昨日の夕方から東萊の本家で茶礼を行うと行ってしまったので、ここは老夫婦だけ残った。女房が一人で茶礼の準備をしているが、出来ないのが私で2階まで運搬したり整えたりすることが多い。考えてみると、床には焼酎を注いで執り行なうので、今日は去年の秋夕に従兄弟の妻の兄が買ってきた百花寿福を思い出した。この機会に飲んでみるかと考えて、探し出し床を整え老夫婦たった二人で正月の祝宴を行うのも面白いことだと思った。私が好む雑煮で、静かな正月は時間が経つのも忘れ、百花寿福のおかげでほろ酔い機嫌となり、2杯、4杯、5杯、6杯とやったが、良い気分になりほろ酔い機嫌で寝ていると誰か二人が入ってきた。

釜山市内に住んでいる甥達だ。その兄弟が私に歳拝（年頭の挨拶）を差し上げようと訪ねてきた。私が歳拝を受けているとシッケ（甘酒）が出て来た。冷たくさっぱりした甘酒を飲んで話をしていると、本家に行っていた家族達が帰って来る。今度は孫娘達が歳拝をし、娘夫婦も歳拝をする。歳拝とはなんだろうか……？この機会がなければこんなクンジョル（女性の最大級のお辞儀）を受けることは難しい。お年玉が問題だぞ……！今からも、他の甥と孫達が私に歳拝を上げようと胡坐をかいているのだ。

このような風習は、散り散りになっていく礼儀や日常生活のあらゆる手筈を、形式であっても維持しようとする方法だ。寂しい旧正月だが、後々まで続く元旦の余韻が気持ちを慰めてくれる。完全に傘寿になる旧正月にもう一度私を振り返って見る時間だ。昨日は立春の大吉を見送り、今日は1歳を加え、2世、3世の祝福を受け、今日も一日を送ろうと思う。

強い風の音で目を覚まし

騒々しい音を立てて窓が揺れ、揺れている物は唸りを上げて、私は目が覚めた。私はびっくりして壁のデジタル時計を見ると1時5分だ。それから完全に眠気が覚め空想の世界に入る。美しい景色が展開し、秘境を隅々までくまなく見回しながら奥深く入って行く。コシ洞窟、ノドン洞窟、ファソン洞窟、ここかしこの神秘さを見物しながら再び正気に戻る。再び川の水が流れ、川岸の柳と秀麗な山の展開……こんな景色を見ながら……再び衝撃を受けた北窓が音を立て私の眠りを覚ました。3時40分だな……心の動揺を感じながらトイレに行ってきて、また寝ようかどうしようかと思ったが、私の健康を考えて寝床に横たわる。風の音は弱まり静かだ。

環境整理員の清掃車と騒々しい人の声で目が覚め、時計を見ると4時55分になっていて、KBS 2ラジオをつける。暫くするとニュースになり、5時5分からはいつも若々しいジヨンソ アナウンサーの時間になった。ラジオを聴いてから私は起きてコンピューターをつける。耳ではラジオを聴きながら目ではキーボードを見ながらやたらに速く叩く。頭の半分はラジオに神経が行き、半分はキーボードに文章を書くのにと分けられている。今日も楽しい一日になることを念願する祈祷は、キーボードを叩くのを終えた後で始めなくてはならない。眠りから目を覚ますと、私がすることはこんなことだとすると難しいこと

はない。この程度が人生なら誰でも出来ることだ。これ以上難しいことが生じないよう、このまま永遠に生きられれば幸福だと言えるのだ。

正に千年でも万年でも生き得れば天国でなくて何だろうか……！これ以上を更に望むのは欲張りでなくて何だろうか……？人は沢山の金を持ち、そして沢山の不動産を持っていながら、いつも足りないと不平をいい、財産を貯めることに汲々としている。それが不幸を呼ぶのだ。情愛深い友人としょっちゅう会って安い食べ物に焼酎一杯やりながら楽しむ時間がどんなに幸福なことか、金持ちには想像も出来ないことだ。

立春不吉にならないように

立春大吉とは知っていたが、立春不吉だったなあ……と言いつつ不平を言う。ある奴が勉強せず怠慢だったので大学入試に落ちた。勉強を熱心にしてこそ試験にも合格するのではないか！とって父親から口喧しく叱られた。普段よく勉強しない奴が落ちれば不平をよく言う。それはまぐれを願っている人で、よく不平を言うのだ。

只を好む人……賭博を好む人の僥倖心は大きいのだ。立春が過ぎ春が来た、とはいうが、これは寒さが消えると信じるのが雨水……啓蟄が過ぎて初めて春が来るのだと言う考えを暫く失くしたためだ。19日が雨水で、3月5日が啓蟄だから、25日間ほど待てば春になる暖かい気候で、鳥が鳴き花が満開となる春となる。今朝は少しは気候がやわらいだようだが、まだしっかりと用心して外出しなければいけないと考え、立春不吉とならないよう願いながら一日を始める。

夜半の騒動

孫娘の息が絶えるような声で目が覚めた。女房がどうしたのかな、と隣の孫娘の部屋に行く。トイレに行ったり来たりする音が騒々しい。どうしたのかと私が出てみると孫娘が胃痙攣とのことだ。

急に眠ったが、こんなことがまたあってはと、父親が病院に行く準備で自動車を稼働させていて、車内では先ず、吐いてしまえるように用意している。

119番に電話するか……と思ったが……隣に住んでいる妻の妹の家に電話すると、早く行って指に針を刺して血を出さなくてはならないと、緊急に夫婦が走ってきた。この人は指を刺す選手だね……1時30分から無我夢中で騒動を繰り広げる間に、沢山吐いてしまい、指を刺したり抜いたり、胃腸と腹に灸を据えてみると、3時30分になった。もう大丈夫だろう……ぐっすり眠っていて、私も寝入って一時間経って起きると4時半だ。洗顔し、祈祷を捧げ、出掛ける準備をし、6時半の明け方のミサに出掛けた。

今帰ってきて、夜半の騒動を思い出しながらキーボードを叩き始めたが、今日の集まりがあるが日曜日なので……どうするか……分からない。

三寒十温

三寒四温は冬の季節の気温が毎年順調に循環する気温だった。今年の気温は特異な関係で三寒十温で変動したようだ。気温が和らいだようで今は春だなあ、といいながら安心するが、恐ろしいことにまた明日はソウルでは零下9度だとの予報だった。そして体感温度が零下20度に達すると言うのだから驚かざるを得ない。三日間が寒ければ四日間は暖かくなるということを見捨て、三日間寒ければ十日間も暖かい気温が、急に寒くなれば、これによって風邪に掛かる人が多くなり決してよい現象ではなかった。

明日から気温が急に下がり寒くなるというので、ひどく憂慮するところだ。日本語で「勝つと兜の緒をしめよ」という言葉は「戦いで勝つても兜の紐を締めろ」ということだ。我々が寒さが過ぎたと服装を軽く春着に着替えたら、突然寒くなると間違いなく風邪を引くことになっている。この格言はその程度でなく、人が生きて行く上でよく出くわすことが多い。卒業すると言って、今まで着ていた学生服を卒業式場で破り捨て、小麦粉を振り掛ければ、人生が終わったと言うのと同じに私には聞こえる。大学に合格したら今からだと思わず、勉強は終わったと言わんばかりの行為で、大学で勉強をしようとせず、自分の将来を埋葬してしまうものだ。

青年は目覚めなくてはならない。この国を更に発展させようとするれば、現在直すべきことが余りにも多い。そのみならず、寒心に堪えないことが多過ぎる。

喪家の狗

喪中の家では主人が犬の食事の世話をするゆとりがない。それで憔悴した人を喪家の犬と比較する。

孔子は生国の魯の国で王族達との関係がこじれ、十余年の間、衛、曹、宋、鄭、陳、蔡などの諸国を行き来したが、これは自分の抱負を受け入れてくれるほどの所を探そうと言う考えからだった。

孔子が鄭の国に行った時、弟子達と道が行き違い一人きりで城郭の東門に立っていた。弟子達が自分を探して来てくれるのを待っているところだった。ところで、この様子を見た鄭の国の人々が、師を探してさまよう弟子子貢と会い、東門の横で見た孔子の人相を話した。その額は堯に似ていて、その襟首は皋陶（舜・禹の賢相）のようで、その肩は子産（鄭の賢相）にそっくりで、すべてが一昔前の聖賢と呼ばれる人達と似ていたよ。だが腰の下は禹と比較すると3寸短く、疲れ果てていて草が枯れた状態で、まるで喪家の狗と同じだな……子貢は孔子に会ってこの話を伝え、孔子はにっこり笑ってこう言った。

容姿に関する批評は必ずしも当を得ているとは言えないが、喪家の狗のようだという言葉は当たっているな……うん、言い得て妙だ……！

結局孔子は意志を果たさないまま魯の国に帰って行った。

万里の長城と阿房宮

万里の長城は臨?から遼東まで延々1万余里に及んだ。流賊とは騎馬民族の匈奴をいうが、匈奴にだけは脅かされてびくびくしていた。万里の長城を築いた人は始皇帝が始まりではなかった。春秋時代の末期から戦国時代にわたり、齊、中山、楚、燕、曹、衛、陳などの諸国により作られた。

始皇帝より150年前に「長城」という言葉が使用され始めていた。1万里と言えば4000キロメートルに達する大きく立派な城だ。阿房宮と驪山陵は始皇帝が起こした巨大な土木工事の中で、「万里の長城」とともに大変有名な造営だ。淮水の北岸に270個の宮殿と楼閣が並び立ち、その中には諸侯から奪ってきた美人と鐘鼓なんかで一杯だった。一方、始皇帝の墓所である驪山陵の造営は秦王になった時から着手されていたが、皇帝になった後では従来の規模では満足することが出来なくなり、もっと宏壮に拡大されたが、これも在世中には完成せず、2世皇帝時代に引き継がれた。

葛藤解消の論理

エドワード・デボノの著書に垂直的思考方式と水平的思考方式について書かれている。

[1]垂直的思考方式は井戸を深く掘り下げることで.....これに反し水平的思考方式は井戸を何箇所も沢山掘ることだという。エドワード・デボノ博士は世界的な大きな紛糾を解決したと言う。

[2]韓国の労使紛糾は経済発展の1段階になったことを意味する。2段階では経済発展に積極的に寄与するのだ。

[3]使用者が賃金外の要求に努力しなくてはならない。いわば勤労条件、交通、厚生施設などだ。

[4]使用主が先ず行動しなければならないのだ。事態発展に形態も説明してやり、紛糾を防がなくてはならないのだ。

[5]水平的思考方式とは、1)先手的、2)霊的、3)アイデア問題だ。創出の特別チームを置くとか、点検を徹底的にやることだ。

[6]労使紛糾の葛藤は、

- 1)給料引き上げを表面に出しているが
- 2)福祉施設を希求しており
- 3)人間待遇を要求しているが、もっと大きな目的があるのだ。

春が来て再び冬が来て

三寒十温が今は三寒三温にと速度を速め、近頃の若者達の歌と踊りに拍子を

合わせている。

えっ…….そうですか…….? 歳月も性急になったようだ。新しい人達は性急だ。それだから…….言葉も速く、行動も速い近代人は寒さも思い通りにいじくっているようだ。

昨日の零上10度が、急に今日からは再び零下になり数日間継続すると言う。だから、また冬になるというので、また武装しなければならない。寒ければ火の用心をしなければならず、水の凍結を防がねばならない。そればかりか。風邪を用心しなくてはならない。風邪は万病の根源だと言うから、とにかく健康が第一だ。元老人達よ…….根気…….勇気…….五気…….をもって掲示板を活発に…….作ろう。

土の中で歌声が

眠りから覚めると、土の中から音楽がかすかに揺れ動きつつ聞こえてくる。時計を見ると明け方3時だ。どこから歌声が聞こえて夜明けの雰囲気を醸しているのか…….と考えると、昨夜カセットをつけてリバーズにしておいたため、一晩中私は眠りながら歌を聞いていたのだと分かった。いわば子守唄を聞きながら眠って、音楽と歌を聞きながら楽しく眠ったので熟睡することが出来たのだ。乾電池を新しく入れ替えておいたので、支障なく一晩中素敵に楽しい歌を疲れもせず私に奉仕したカセットにご苦労様とお礼申し上げる次第です。

今もカセットの歌を聞きながらキーボードを叩いているのだ。今日の明け方の室内の空気はぼかぼかだ。今日は晴れかな…….? と言いながら春の山野を幻想してみる。今は私の心は現実から抜け出したのか、色々な声が、昔の人が土の中で話しているような錯覚をしている。流れ行く歌は故人達が私を抱いてくれているような親密さを感じさせる。

午砲と儒達山

昨日は昼寝をし、起きて壁に掛かった時計を見ると12時丁度だった。昔幼い頃のことだ。12時になると木浦では午砲を撃つ。午砲とは、儒達山の今の儒仙閣の場所に置いてある大砲に火薬を入れて破裂させると大きな音でドカン…….!と木浦市内の隅々まで聞こえる。今は家々ごとに時計が沢山あるけれど、その頃は家に時計がない家が大部分なので、時間がよくわからないことが多い。時計があっても正確でなく、ラヂオは貴重なものなので、正確な時間に合わせるのも骨が折れた。

午砲は時間を知らせ、昼食時を知らせ、正確でない時計も合わせる役割をした。幼い頃は、毎日午砲を撃つとその前の林の中で砲弾の破片を拾おうと子供達が行く。幼い頃は飛行機が上空を横切ると、昼食を食べていてもスプーンを手に持ったまま庭に飛び出して空を仰いだことなどを思い出す。最近では儒達山では儒仙閣と達仙閣が名勝となり、「木浦の涙」の記念碑が、李蘭影の追憶を新たにしてくれる。

残寒の季節

雨水が過ぎ3月5日の啓蟄が近付くと春になったようだ。そんな暖かい気分していると、寒さがもっと厳しくなり、冬着が手放せなくなり日光を生半可なものを感じる。外出のため服を着替えようとする、厚ぼったい肌着を着る気分がしない。暖かい毛のズボンにTシャツ姿……そして外套をトスカナあるいはあひるの羽毛で、まだ武装して出歩かなくては風邪を防ぐことが出来ない。夏なら夏……冬なら冬という覚悟がそれに対応する最良の方法なのだ。今日も国際市場に出掛けなくてはならないことが……昨日買って来たホッチキスが故障していたのですでに電話を掛けておいた。完全なものに取り替えるためだ。

私は、ホッチキスは最も小さいもの……そしてピストルのような強い力でA4用紙50枚程度の本を綴じるものがよい……ところで200枚程度の本を綴じようとするればもっと大きく力の強いものが必要だ。それで2万ウォンほど出して買う時、店の主人が300枚は問題ありません……というので、それでよいと買って帰ったが、針が半分しか入って行かない。やっと100枚程度しか綴じることが出来ない。お金をもっと払っても200枚を綴じることの出来るのを手に入れたと思う。絶対必要なものは糊で正式に作ればよいのだが、参考用の本は骨折って糊で作らず、ホッチキスで作るのがよいようだ。

ホッチキスで本を綴じるときは、左側の上側に上下にホッチキスを2回だけ押せば、読むにも保管するにも良かった。今日は別に予定もなく、国際市場に出掛けて取り替えた。本の整理でもしていれば、生半可な残寒を避けることが出来るようだ。

酒を一杯飲みながら

みんな出掛けてしまってもう2時になるのに、一人留守番をしているもの悲しい限りだ。昼食時になっても帰って来ない。よし、帰って来ようが来まいが関係ない。しっかり隠しておいた飲み残こしの洋酒を取り出す。肴は何かあるかな……？と下の階の冷蔵庫を探してみたが洋酒の肴は適当なものがない。仕方ない、私の部屋にピーナッツがあるではないか……！大きな洋酒の杯に氷を一杯満たし、水も少し注いで上がって来て、洋酒を入れる……昼食が問題かね！酒があるからな……と少しづつ飲みながら時間を過ごす。そして乱れる私の心を整理している。

今日は月曜日……明日が晦日だ。しかし、良い報せはないので、寂しい心が胸を暗くする。だから酒一杯で心をなだめている。

居間から春の気配がする

居間には赤いデンドロビウムがぱあーっと咲いている。春の気配が自ずと

生じる。その後咲いたキンギアナムは白い花が満開だったが、遥かに後で咲いたのに今は灰色に褪色している。

いずれにしても春の気配が家の中に漂っている。深夜電気の温室で咲いた君子蘭はもう花がばらばらに落ち、半分も残っていない。春が近付いて来たのだ。今日は暑くて、車の中でも窓を開けてエアコンを掛け……暑さを吹き飛ばした。寒いと言ってた冬はもう去ったと言ったら、明日はまた花冷えの寒さが来るといって妙な天気だ……と不平を言ってみる。また明日の寒さに備えよう。

昨日よりはより良く生きようの印

私は毎日日記を書いている。日記を書くことを一生通して行っているといえは嘘になる。一生と言えは、母の腹の中からこの世に生まれると同時に日記を書かねばならないからだ。初等学校6年のときから書いた記憶がある。家を何回か移りながら生きて来た。移る度に日記帳は燃やしてしまった。そして釜山に来て、再び新しく日記をつけるのを30年間続け、10年余り前に、明け方に山登りから帰って来ると隣の店の主人が道端で焚き火をしていた。私は必要ない本を焼き捨て、身の回りを整理したかった。そして家に入って取り出したのが多くの日記帳などだった。全部燃やすのに一日かかった。今思えばそれも私の歴史だったので惜しい気がする。時折、偶然どれか1冊取り出して読んで見れば感懐を新たにするだろうに……私がどうして……そうしたのか……？

私は今日も日記をつけている。ところで昔と同じく長々とした感想文は書かない。実用的に要点だけ記録しておく。一件一件の要点の上には 印をつける。これには意味がある。 印は上昇を意味し、 印は下落を意味する。そして私は「昨日よりはより良く生きよう」という意味で 印をつけるのだ。

年取ったからと言って世の中がすべてうまく行くものではない。今からだという希望を持って生きている。

雨降る歩道を眺めながら

花冷えの寒さというが、9度だとか……そして明日は12度と言うので安心するが、気を許してはいけない。大きな郵便車が家の前で止まる。家内が出て行くと郵便物が到着していた。孫娘にきた郵便物だ。近頃、電話線が火事になり、新しい家のは直したが、古い家のを直すに忙しい。嬉しくなる。今日は色々な物を整理しようとしたので忙しい。孫娘は欲がない。人にあげるものだけ取りまとめる。

私は明け方風呂屋で50分間熱い湯の中で瞑想して出て来た。やはり気持ちがさっぱりする。それから孫娘が使っていた586を、ソウルの初等4年になる孫に上げて使えるようにと荷造りしてやる。ペンティアム2は、中2になるその兄とおもやいで使っていたので、やはり不便なようだったので別々に使えるように送ってやればいだろうと思って荷造りするのだ。

雨が降っている。貴重な雨は静かに降っている。私は、末の孫が今の486を

586 にアップグレードして、一人で思い通りに使えたらどんなによいだろうか？と思いながら荷造りをしている。どうせならプリンターまで送ってやれ... と私は思いやりの心が起きる。その子達は私がソウルに行ってしまったのを見て、初等学生なのに指が稲妻のようにキーボードを叩いた。そんなに上手に出来るのなら新しいのを買ってやっても惜しくはないが、使ったのをやるのに何が惜しかろう.....こう思って荷造りを全部終えた。明日にでも持って行くことが出来るようにしておいたので、自動車の後ろに載せるだけでよい。雨が降るせいか歩道には人影も稀だ.....雨は私の心を静かにさせてくれる。悲しいのか嬉しいのか私には分からない.....ただ春雨が私の心をなだめているのだが、曇った空の彼方で日光は私の心が分からない振りをしているのか.....

冬は温突が宝物だ

寒い冬だと言っても家の中が暖かければ問題はない。外に出なければ良いのではないか.....！外で仕事をする人は仕方がないが、私のような人間は稼ぎに出掛けることもなく家で楽に過ごしていれば良い。こう考えると室内のオンドルが一番の宝物だ.....！と思ってほかのことは心配せず、昼寝などして気ままに生きているが、毎日オンドルの温度が熱いくらい暖かいので腰の治療になる。ところで今日の明け方はオンドルが冷え冷えしていてどうなったのかと思ったが、モーターが回っていないのではないかと深夜電気ボイラー室に行くと見るとモーターはちゃんと回っている。

大変なことになったとボイラーを調べてみると電気が消えている。湯の温度は35度しかない。もう深夜電気が消えるのか.....？だが5時にしかならないのにもう消えるわけがない。電源を開けてみてもONになっているし、他の電源のモーターは異常なく回っていて、我が家の技術者はすべて旅行中だ。上の婿は海大出身の機関長だ。ボイラー程度は問題ない技術者だ。従兄は前検事総長の母親が亡くなったのでソウルに行っており不在だ。

技術者がもう一人いる。彼は数日前に結婚した孫娘の新郎だ。やはり海大機関科出身だ。だがシンガポールに新婚旅行中だ。大変なことになった.....と言いながら部屋に帰った.....もう一度横になって考える。どうしようか.....？業者を呼んでも直ぐには来ない。うやむやに引き伸ばし、何度か督促してやっと来るのが近頃の技術者だ。それだけではない！一回出張して来れば別に何もしなくても逃げ口上を言って、一番安くしますと行って10万ウォンは飛んで行く。婿達が来るといっても、ソウルに行った者は3日後、シンガポールに行った子供達は5日後だ。

花冷えの寒さが明日になれば和らぐと放送している。心配しながら寝ていたがぼんと起き上がる。ああそうだ...ボイラーのヒューズが切れたのでは？と、もう一度深夜ボイラー室に入って行った.....大きなボイラーの隅まで調べてみると、後の隅にある自動遮断器が下りている.....よし...これだと自動遮断器を上げると赤い豆粒ほどの灯りが3個ついた。もう大丈夫だ。だが心配が先立つ。どうして自動遮断器が下りたのか.....が問題だ。何か問題があつて遮断器が下りたのだ.....と不安な気持ちが拭えずに.....見守っている。

やはり

少し遅く家に帰ると部屋が冷え冷えしてボイラー室には灯りがついていた。ボイラー室に入ってみると上の婿が深夜電気ボイラーを分解して直していた。婿の性格は何事でも始めると夜明かしをして終わりまでやり遂げる性格だ。今夜も徹夜して仕事をするような気がする。それで私も眠ってなどおられようか……！

電流の非正常により発生する、スイッチが落ちることは危険なことだ。深夜電気と言うのは夜だけ電気があるものだから、夜でなければ仕事が出来ない。そんな関係で徹夜してでも修理しなくてはならない。私はたやすくスイッチを復元しておいたが、あれは応急処置であり完全な処置ではない。完全にはしておかなくては安心できない。婿に無理なことをさせてすまないけれど、そうかといって冷突部屋で眠ることは出来ない。やはり、人は生きて行こうとすれば無理をしながら生きて行くことがあってこそスリルも感じるようになる。そして勇気も生まれる。精神も刷新される。

まだ程遠い

別に易しいことではないな。

複雑なコンピューターの移動を易しいと思うのは愚かだな……。

何台か……設置すれば、一つが故障し、交代で直し、故障し……これが人生なのさ……スピーカーを正しく接続しようとして本体を入れたり出したりして、キーボードが放り出され、びっくりして用心用心して……試験してみるとモニターが真っ暗で、文字が現れてもキーボードがエラーだと言う。サービス不可なので……消えもせず、このままほうっておくことも出来ず……仕方なくやたらに電源を消してしまったが……だがキーボードの新しいのを買おうと出掛けることも出来ず……一旦は断念したが……気持ちがあすっきりしない。もう一度本体を取り出す……キーボードのプラグを調べてみる。半分抜けている。正しく接続し、再び電源を入れるとOKだ。安心安心……だが今から作業が沢山残っている。まだ程遠い……明日からもう一度継続しよう……。

紛失した鍵騒動

家族全員が鍵を持っているので呼び鈴を押すことなく、各自が自由に出入りしていて神経を使う必要がない。いつかは高等学生の孫が鍵をなくしてしまったら騒動を起こした。すぐさま国際市場へ行って錠前を何万ウォンか払って買ってきて表門に取り付け、鍵は9個必要だが、錠前を買う時2個ついてくるので7個複製した。

それは、誰かが拾って門を開け入ってくれば大変なことになると戒めてくれ

るためのものよ……だから絶対に鍵はなくしてしまっただけではいけない、という考えを頭に叩き込んでおいた積りだった。それから5年は経っただろうか……今度は家内が鍵をなくしてしまい、家中を隅々まで探したが見付からなかった。今度は高い錠前を新しく買うことが出来ず、複製をして密かに差し出した。すると眼を丸くして物も言わない。いいよ、いいよ、構わないから……そう言いながら、みんながこんなに用心すればいいんだと思った。今はもっと用心してそんなことが二度と起きないだろう……と思いながら、万事用心を重ねながら生きて行くことが大切だということを、そんな小さなことから大事に至ることで戒めている。

子正は何を意味するか……？

子正（午前0時）は一日を越えていく限界点だ。子正から次の日が始まる。こうして一つ一つ折り畳んで積み上げれば一月になり、また一年が過ぎて行く。そして一年が二年になり自分でも分からぬ間に十年が過ぎれば、その十年が去るほどにまた十年が訪れ、わずか6回で還暦といって人生の脈絡がだんだんと衰弱して行く末期を認識するようになる。生活が思い通りに出来なくなるにつけ、険しいことばかり多く、これから先を観察すると良い日はないようで……人生を恨み嘆くようになり、甚だしくは気が塞いで四柱を見てもらいに行き、60を超えた人は運が全部去ってしまっているのだから見る必要がないと拒絶される。こうして老人は何処へ行っても待遇されることはないなあと言いながら、力の抜けた老人は更に力を奪われてしまう。迷信には違いないが、もしかしてと思って、朝になると花札で今日の運勢を見てみようと思えば外出するのも、一日の幸運を願う心だと思えば理解できる。1時間というのは短い時間のようでも、積もれば1日になり1月になり1年になるから、1時間というものは貴重なもので、1日を越えて1分の差で日付が変わると言う大きな意味を持つ子正というものを銘記しなければならない。

生と死は紙一重の差

私は何処にも病気がなく健康だと思って生きてきた自信があって、食事にも行動にもかなり無理をしても気懸かりなことはなかった。歯がちくちく痛んだり、目が手術を要する白内障だったり、腰を無理してなった病気に対して治療を受けてきたが、すべてうんと良くなった。その他の病気はなかった。いつも注意しながらも時々1回は過飲をすとか……体に有害な過食だとか、時には夜明かしをする時もあり、健康を再び振り返る時が多かった。

今日は友人と会って昼食をすることになったが、初めにテンコチュ* 1個を味噌で和え、半分を食べ、焼酎を1杯の半分ほど飲み、汁を一匙掬って飲んだ。すると急に胸が焼け我慢できない。背中には冷や汗が流れ、顔は汗で濡れ、ひとときも我慢できなかった。

結局はセミヨン薬局に行き、説明して1日3回分の薬を買ってきた。薬の包を3回飲むのなら、明日の朝まで飲まなくてはならない。そうすればすっかり治るのだ。それなら幸いなことだ。家内が、痛い（痛みが来るか）と言うので、帰らない（来ない）筈だったが帰った（来た）と言うと、それはどういうことかと問い返す。閻魔大王の遣わした使者が、行こうというのを、一寸だけ待ってくれと言ったのさ……！もう一寸だけ待ってくれば、私のすることが終わった後について行くよ……！という、女房も言葉の意味が理解できない。使者の目を盗んで逃げて帰ったと言うと意味が分かった……いい加減に過ごす世渡りが楽しいかも知れない……！ひどい胸の痛さを我慢しながら、薬を飲んでよくなったようだ。紙一重の差で家に帰れずあの世に行ったなら、家の中が寂しくなるだろう……。

訳者注：赤く色づく前の固くて青い唐辛子

テンチョ*を食べなかったので心配ない

今は酒席に座ると怖い思いがする。杯が私に回ってくるのが心配だからだ。これくらいだから私がどんなにひどい目に会ったか分かるだろう。私の好きなテンチョのせいではない。数日間連続で酒を沢山飲んだ関係もあるが、その間にテンチョは2回しか食べなかった。それも1回に半個が私の限界だ。テンチョがそんなに多いわけではない。疲労の関係もあり、食べすぎたことも1回あった。その関係で軽い胃痙攣になったのだった。だからテンチョ鬼神の使者が私を連れて行こうとしたのだった。

だが幸いにもあの世に行くことは免れて、今日も17期終了式と3月の元老坊月例会のため、天下壮士でサイダー1瓶を私一人で全部飲み、みんなは焼酎をコップで2杯飲むのだから罪深いことだ。明らかに今日は唐辛子が出てくることだったが、テンチョがあったのかなかったのか分からない私は、テンチョでなくても唐辛子のような形をした物も食べなかった。だから心配することはない。これは誰かが証明しなくてはならないが……テンチョ鬼神と一緒に連れて行くのが怖くて証明してくれるかどうか？

訳者注：前記テンコチュより更に辛の唐辛子とか。慶尚道名物？

古希には百歳酒が良い……？

*

*

私の妹が何日間か私の家で過ごした。今まで晋州の下の息子の家で過ごしていたが、私の外孫娘の結婚式に来て、その間久し振りに一緒に過ごそうとって、釜山に住んでいる上の息子の家に行ってみなくてはと……。

数日前に来て、3月19日に古希を祝おうとソウルから娘が来て、晋州からも下の息子が来て、上の息子の主導で、家族だけ昼食時間に集まろうということだ。釜山では私しかいない兄なので、必ず出席しなくてはならず、そして祝福してやらねばならない。そう思って現代百貨店の後のナムガンという食堂で家族だけの昼食時間を持った。

初めて行くところなので、探して行くのにも尋ね尋ね辿り着き、準備しておいた部屋も風雅で息子二人の夫婦、娘夫婦で6名、我々夫婦2名、主役まで入ると9名だ。ソウルから来た妹の婿が私に、酒は何を飲みますか？と聞いた。私は焼酎でいい……！と聞いたが、百歳酒は如何ですか？というので、それは味が薄くて……と言いかけたが、それがよければそうしよう……！こうして百歳酒が出て来た。先ず私に一杯注ごうとするので、いや、この席では古希の当事者が主人だから先に注ぎなさい……とって、その次に私が受けた。

百歳酒は13度の薬酒に該当する酒だ。焼酎は23度だから半分にしかならないアルコール成分になるか……肴も簡単で一人分が幾らだろうか……？と考えながら、百歳酒も幾らするものか分からないが、私は1瓶をコップに注がずに飲んだけれど、さっぱりした飲み物ではなかった。

しかし後で分かったことは、1人分の食事がおおよそ25,000ウォンとのことだ。ナムガンという所がこんなに高い所かと本当に驚いた。そして百歳酒は深い意味があったことを私は知らなかった。いわば70歳の古希に100歳まで健やかに生きて下さいという意味でこの酒を選んだようだ。

春分が遅刻したようだ

今日の天気予報では釜山は5度だったが、昼には16度と言う春の天気になるようだ。春分は昼と夜が同じ時間だと言うが、今年の春分は16分違うと言う。昼と夜が同じ日は3日前に過ぎたようだ。

辞典を見ると春分は3月21日頃とされている。1日後が大体合っていると見れば、今年は1日先立ったということになるが、その実は3日遅れたのだ。春思は濃くなって行くが、迎春の気持ちは遅れる。春雨を待つ気持ちは一言で言えば「春雨だ濡れて行こう」という日本語があるように……我々も春には雨が貴重で気を揉み、農村ではどんなに雨を待っていることか……！と思いながら、春を知らせる可愛く美しい花を見たくてたまらない……！

もごもごした服はすっかり脱ぎ捨て、風呂の中で適当な温度で首だけ突き出し瞑想をしていると、風呂の湯が冷え冷えとして来て眠気が覚める。これでは風邪を引く。熱い湯をひねった。暖かい温度にして再び瞑想する。妹の古希の宴に行き百歳酒を飲み、帰って風呂に入ったのを思い出している。旅の疲れと酒疲れを一挙に癒してしまう積りだった。こうして夜が去り朝が来れば春分となり、続いて春になり、春思を感じずる心は年寄りを若くしてくれる。

交友と趣味

人間は死ぬまで学ばなくてはならないということは言葉では常識となっている。言葉はそうだが実践するのは空の星取り（不可能）だ。それは難しいことだと考えるからだ。学ぶと言うことは本を読み研究するだけだと考えているからだ。

人間は目を開けさえすれば、すべて学ぶことばかりだ。道を通るときも、初めて見るもの、初めて聞く話、すべて知らなかったことを知らせてくれるようになることは、すべて学ぶ対象だ。最も重要なことは、三歳の孫から学ぶことがあるということだ。それよりさらに学ぶことが多いのは、友人達との間で学ぶことを発見することだ。年を取るにつけ、集まりが生活の一部を占めるようになり、そんな時間を生きる上での慰安として楽しむことは奨励する価値のあることだと思う。

だが、そのような間柄で親睦を図り、お互いに助け合いながら生きることは良いことだが、果たして学ぶことがあるのかを考慮してみなくてはならない。人は悪い友に会うと駄目になることが多く、良いとも会えば幸せになることも多い。アヘン中毒者になることもあり、博打打になることもあり、泥棒になることもあるのは、悪い友に会ったのが原因で滅びることになるのだ。

のみならず、我知らず交友の行動と言行が伝染していて、知らぬ間に相手と同一な人間として取り扱われるのは憤懣やるかたないことだ。丁度方言と同じく、言行が自分の体から漂い出るようになるのだ。香ばしい言行が好ましいのか、さもなければ、聞くに堪えない言葉と行動にあきあきして嫌気がするのが好ましいのか……？ということとは、繰り返すようだが、情愛に満ちた高尚な論談が、聞く人に情を与えるかと思うと、下品な言葉、人を無視する言葉によって仲違いを起こすことにもなり、このような言行から、学んだり学ばなかったりの結果をもたらすことになる。

それ故、人との間では、心安い間柄でも親しい友人とはいえ礼儀を守らねばならない。小さなことにも、我知らず無駄な妄言を吐くと言う間違いを犯すことがある。従って、趣味、生活のすべてにしみ込んでいる趣味は、良い癖なら生涯の助けとなり、悪趣味の場合は生涯の邪魔となるのだ。栄光と富貴を度外視し、人格を損なわないものが学ぶべき価値のあるものだ。

小人童子達に私の手足を縛られて

小人国に行って手足を縛られる童話を読んだことがあるが、そんな話と似た実話だと言えるかどうか……！暇潰しに昔の夢の話に入って行こう。

今から30年前にポミル電話局が新築され、まだ仕上げ作業が続いていて、私達幹部も当直することになった。私が臨時宿直室で大きな莫塵に寝ていると、拳くらいの大きさの小人の童子が10人位現れた。私はびっくりして起き上がり電灯をつけた。だが誰もいない。私の神経が衰弱したせいかな……と灯りを消

さずに再び寝た。頭がぼうっとして眠ることも出来なかったが、どこからか小人の童子たちが10人位入ってきて、私に飛び掛り紐で手と足を縛った。私は気力が全くなり身動きが取れない。声も出ない。夢でもないようだ。宿直室の部屋もそのままだ。壁に掛かっているものや、室内の物品も揃っているようだ。異状なし。時計を見ると2時だった。

私はもう一度眠ろうとした。だが眠れない。今度は私が寝ている枕元に私の靴下が置かれている。足に履くものを枕元に置いたので気持ちの悪い夢を見たのか……？と靴下を他所に移したが、新しい家に鬼神がいるのは間違いない……と急に恐ろしい気がして、全身がぞくぞくする。起き上がって守衛室に行った。守衛と当直員がいた。お寝みになっていたのにどうして……お目覚めですか？というので、小人の童子の話をした。そんなことがあるんですか……！そんなことがあった後で、その部屋が機械室の一部になったけれど、謎は私が死ぬ時まで解けず、あの世に行けばきっと分かるだろう。

月下氷人

月下氷人という言葉は結婚の仲人の話から出たものだ。

[1]唐の国に韋固という未婚の男性がいた。宋城という所に行ったとき、月夜に地面に座って本をしきりにめくっている老人がいて、その傍に大きな袋が置いてあった。

「何をしたらっしゃるのですか……？」

「この世の中の婚姻に関して調べているところさ」

「袋には何が入っているのですか……？」

「ちえっ、紐切れが入っているのさ。これが夫婦を結んでくれる紐じゃ。一旦これで繋げば二人がどんなに遠くにいても、またどんな仇であつても夫婦になるようになっているのさ……！」

「それなら私の妻になる人は今何処にいるのですか……？」

「この宋城にいるね。この北の方で八百屋をやっている陳という姓の老婆がいるが、その老婆が抱いているのが将来のお前の配偶者だな……」

韋固は愛想が尽きて帰って来てしまった。

それから14年が過ぎ、韋固は相州で官吏になり、郡の太守の娘と結婚した。新婦は16歳で美しかったので、老人の予言は外れたわけだった。ある日の夜、韋固は妻の身の上話を聞いた。

「私は実は太守様の養女です。父は宋城で官吏をしていましたが、亡くなったので、乳母が八百屋をしながら私を育ててくれたのです。宋城をご存知ですか……？その北の方にある店でした……」

[2]また、こんな話がある。

晋の国に索耽という有名な易者がいたが、ある日、孤策という人が夢の吉凶を占ってもらいに来た。

「私は氷面の上にいるのですが、氷面の下に人がいて、その人と話をした夢を長々と見ました」

索耽は次のように夢占いをした。

「氷面の上は陽、下は陰なので、陽と陰が話をしたというのは、あなたが結婚の仲人をしてうまく纏める徴ですな・・・事が成るのは氷が解ける頃になるでしょう.....」

間もなく孤策に太守から依頼があった。自分の息子と張氏の娘との仲人をしてくれという頼みがあったが、果たして春には婚姻が成立した！

*前の話の月下老と、後の話の氷下人が一つの単語となって、月下氷人となった訳だ。

遠い親類より近い隣というのは昔の話

遠い親類より近い隣（隣従兄弟）というのは、近い隣に住む人とは従兄弟との間よりも親しく過ごすことを言う。しかし、人間の生活が複雑になり、人情が不毛かつ利己心が強くなった近頃では、世の中は、自分達の生きていくことだけにかまけて隣もなくなった。

アパート生活は隣の人達も知らずに過ごすといいながらも、お互いに相手を詰ったことを聞くことが多かった。しかし、アパートだけでなく住宅街でも同じことだ。私が考えてみても、隣に住んでいる人も何人かしか知らない。それは、此処へ来て44年住んでいるが.....最近では更に人の顔が変わって、知らない人ばかりだ。家を買って移ってくる人もいるが、新しく入って来て幾らも住まずに移住してしまうのだ。黙って出て行き、黙って入ってくるのだ。

甚だしいのは、我が家の真ん前の向かい側に住んでいた人が変わって、朴氏、徐氏が昨年数ヶ月の間隔で移住して来た。調べてみると前の人移住し、他の人が連立住宅を買って入って来たのだという。住んでいるときは親しく過ごしたのに、この2つの家は移住するとの話もなしに見えなくなり、知らない人が住んでいるとは薄情な世の中だ。こんなことも考えてみた。夜逃げしたのか...?と。

右側の隣家は数年前に移住して来たが、70くらいになる老婆が一人で住み、息子がしょっちゅう来て見ており、娘達も往来しているようで、時折顔を合わせると挨拶もして過ごしているが、左側の隣家は新しく入って来たが、私は顔も知らない。家の主人は遠いところに移住して行き不在だ。そのほかには副食店の夫婦は家族の往来が頻繁でよく知っているが、むしろ付近に長く住んでいる人達は色々な姓も知らずに過ごしているが、出逢えば挨拶をしながら、知り合って過ごしている。ところで我が家の前の向かい側に木が沢山あり、在来式の家があるが、人の顔も見えない静かな家だ。道端だが、表門は路地に入り込んでいる。今日明け方4時を少し過ぎていたが、突然泣き声が聞こえたので窓を開けてみると、大きな霊柩車が来ていて、その裏門に飲食物を整え男女声を合わせて慟哭している。誰が死んだのか.....?と家内に聞くと、昨年も90を越えるおばあさんが亡くなったが、今泣いているのを聞いたら「おとうさん」だといいながら泣いているという。

隣に住んでいても互いに知らずに過ごす。そして死んで出て行ったことも知らず、移住して行ったことも移住して来たことも知らずに過ごす。だから.....「遠い親類より近い隣というのは昔の話だ」。兄弟間も遠くに住んでいれば死

んでも知らない世の中で、隣といっても同じことではないか.....？

春雨に濡れながら

長い間の日照りで貴重な雨が、乾いた土を掻き分けて出て来られないでいる新緑の木の先端をしっかりと濡らし、活気を得た生命が春の空に土を掻き分けて伸びているようだ。私は春雨に雨傘を差し、無数の小さな銀の鈴のような雨粒を力強く振り落とし、ビニールの傘袋に折り畳んで入れバスに乗った。貴重な雨だからちょっと濡れながら市内を闊歩したかったが、人が見て気が狂ったと言いたがるのでそれは止めた。国民銀行に電気スタンドをホームショッピングで注文した代金を自動納入するよう入金させ、次は郵便局に行き小額の新規月掛貯金を払い込み、情報通信協力会に出席した。

構内食堂で昼食をとり、帰りがけにクォンギョンファン会員が中風で倒れた後、先月には事務室に立ち寄ったが、1ヶ月後の今日は必ず立ち寄ってみようと考えて事務室に立ち寄った。まだ言葉ははっきりといえないが、意思はある程度疎通できる。うんと良くなったわけだ。嬉しくて仕方がない。暫く座っていて、こわごわ大通りに出た。歩いている途中でタクシーかバスに乗ろうと思ったが、友人の事務所を通りかかったので一寸寄ってみた。かれこれ3時を過ぎたので大通りに出たが、まだ霧雨が降っている。横断歩道で青信号を待って渡ると丁度タクシーが止まっていた。私は雨傘を手を持ったまま、爽やかな霧雨に濡れながら、手で、行くか.....？と信号すると、タクシー運転手が、行くと反応するのが見える。タクシーに乗り瞬く間に家に帰る事が出来た。

どうにかこうにか時が無事に過ぎる

することもなく瞬く間に一日が過ぎ、日付が一日替わるのだなあ.....！空しい一日は雨が降った後からなのか.....肌寒い厳しい風が襟首を洗い首を絞めるのだなあ.....私にとって今日は月給日だ。いつでも25日は公務員の月給日だから、年金も月給として入金される貯金通帳から一部分を引き出して来る。私は月給日をうっかりしていたが、家内は私から一定の月給を貰っているのだ。それだから待っているには当然のことだ。月給を引き出しに行かないの.....？その言葉を聞いて、しまった.....！土曜日だなあ、言わなかったら思い出さなかったかも知れない.....といいながら、月曜日は私がソウルに行ってしまう、俸給をくれないといってデモをしたかも知れないなあ、と家で着ている改良服のまま走り出てタクシーを捕まえた。

帰る途中、私の心の中にはある計画があった。先日買った眼鏡の縁に、レンズは老眼鏡のないのを入れ、別に小さな老眼鏡を買ってきたが、昨夜、釜山駅に行きソウル行きの切符を買う時、眼鏡をあれこれ掛け替えながら切符を確認するのが不便だったので、老眼鏡のついたのを入れようと眼鏡屋に入った。

私が掛けている眼鏡に合わせてみていたが、工場に電話して調べると4万5

千ウォンだという。私が掛けていった眼鏡は老眼鏡なしのレンズだけで3万ウォンだった。白内障手術をした後で老眼鏡つきレンズを3万ウォンで入れたから、4万5千ウォンならば、すでに大分前にレンズだけで3万ウォンするのを捨てたことが惜しい気がした。

だが老眼鏡つきで、私が頭の中で計算したとおり3万ウォンだったら何も言わずに入れて帰ってきたことだろう。このように、いつあの世に行くか分からないながら、買いたい物が多い。

今日は小包が到着した。机の上のスタンドを替えようと思って2日前に通信販売の本を見ていると、気に入った店があり早速電話注文したのが到着したもので、以前の100Vが220Vに替わったため、ソケットのような付属品を買って来て、机の下に寝転がって設置し、整理しようとして暫く掛かった。7Wの蛍光灯なので目に優しい。すでに26日、日曜日だ。明日は早朝ミサに行こうと思うので、これ位にして眠らなくてはならないな.....。

垣根の下に咲いた水仙の花よ

表門を開けると先ず眼に入るのは右側の垣根の下に咲いた水仙の花だ。赤ちゃんの拳ほどの黄色い花がぱあっと咲いた間にラッパのように突き出た姿が可愛い。いつも生き生きとして美しく高尚な姿で、しっかりと一輪.....沢山あるのは下品で、一つだけのときが貴いもの.....。

そして左側の垣根の下には椿の木が一株.....によきと立っている椿の木には濃い一重の花一輪が咲いているが、手の平ほどの庭園を彩り雰囲気を生かしていた。しかし、丸く刈り込まれた椿の木に白や赤の花が咲き始めるとすっかり乱れ咲いて、雰囲気を滅茶苦茶にしてしまった。そして、生き生きとした椿の花は咲いているうちは良いが、首が落ちると地面に落ちた花で乱雑になる。それで、花が多ければ下品になるようだ。こうして取り散らかしている手の平くらいの大きさの庭園は乱雑な雰囲気になってしまう。

周囲の垣根は去年咲いたタムイプナムの残骸が黒ずんで乾上り汚らしい。しかし、幾らも経たないうちに真っ青な葉が垣根を飾るだろう.....27日から今日まで5日間席を空けていたが、色々と変化があるだろう.....ソウルに来ていながら垣根の下に咲いた水仙の花が無事であるように願っている。その間に萎れて花が落ちたら.....と心配している。今夜8時に表門を開けると喜んでくれる水仙の花を想像してみる。5日間の旅行が50日も経ったように飽き飽きしている。

この家には私一人しかいないようだ

ソウルの百貨店を歩き回り、息子の車に乗って電子機器・コンピューターなどを見物し、ソウル駅西部駅まで連れて行ってもらい、待ち時間がまだ一時間.....駅構内で退屈な時間を過ごし、ムゲンファ号に席を取ると、横の座席に4

0代の紳士が乗って来た。私は予め焼酎一瓶と肴を買って、5時間の退屈を紛らわせる積りだった。

列車は動き出し、横の座席の男性に何処まで行くのかと聞くと、やっと、鳥致院まで行くという。昼食時に百貨店の食堂で簡単な食事をしたので、列車の中では流れ行く景色を見物しながら一杯やるのが良かろうと思っていたので、その客に酒を一杯やりませんかと聞いた。酒はやりませんというので、予め準備して来た飴玉を3個上げながら、これでも召し上がってください、私は酒をやりませんかから…….という、有難うと受け取って口に入れる。そして私一人で焼酎と肴をやっていたが、暫く眠っていた。眼を開けてみると横の人は跡形なくいなくなっていた。

次に娘さんが来て座る。私は、何処まで行かれますか…….？といったが、ぶっきら棒な声で、クミよ…….！私はまた飴玉を上げた。有難うとも言わず受け取って食べる。そのうちクミに列車が停車した。この娘さんは荷物を取りまとめて、挨拶もなく列車から降りる。

クミからは娘さん7～8人が乗る。その中の一人が私の横の席に座る。飴玉も品切れで、この娘さんには上げなかった。しかし私が、お嬢さん達は勉強してきたのですか？と無駄口を叩いた。すると先生達だ。ああ…….どちらに行かれるのですか、という、大邱です、というので、学校の先生達が大邱から毎日通勤されているのですか？という、はい、そうです、という。やはり学校の先生は少し言葉遣いが違うなと思った。大邱に着くまで娘さんは眠っていた。大邱に到着し、私は娘さんを起こした。大邱に来ましたよ…….！という、西大邱だという。

西大邱に着いた。娘さんは立ち上がると私に丁寧に挨拶して出て行く。私はやはり学校の先生だけのことはあって礼儀が正しい…….と心から思った。そして別の二人は飴玉を上げたのに挨拶もせず行ってしまったのかね？とも考えた。西大邱からはおばさんが4～5歳になる子供を連れて私の横の席に座る。ところで3人座るのはよいのだが、子供が私に触って来るので本当に煩わしい。私がトイレに行ってくる間に何処に行ったのかいなくなった。前の1～2号車の席が空いていたのか、そこに移って座っていた。私は良かったと思ったが、次の駅から娘さんが2人乗って来て、おばさんを追い出してしまった。おばさんが子供を連れてまたやって来た。今度は前よりももっと体をこすりつけ、とても座っておられない。私は我慢出来ずに子供に、大人しくしろ…….！といった。その母親らしい人は、倅が他人の邪魔になろうがなるまいが関心がない。クポで降りるおばさんも一言の挨拶もなく降りた。

家に帰って疲れて寝てしまった。明け方風呂屋に行き疲れを取ろうとしたが、別に効果がない。朝飯を食べ、また寝ていると電話の音で目が覚めた。呼び出し音が何回かしても、出る人がいない。仕方なく私が立ち上がり電話に出た。孫の奴が統合病院から電話を掛け、母親と替わってくれというけれど、「この家には私一人しかいないようだ」、もう一度電話しろといった。